慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	福澤諭吉とアート : 奢侈・進歩史観・フェミニズム
Sub Title	Fukuzawa Yukichi on art : luxuries, progressive view of history and feminism
Author	池田, 幸弘(Ikeda, Yukihiro)
Publisher	慶應義塾大学アート・センター
Publication year	2009
Jtitle	Booklet Vol.17, (2009.) ,p.126- 136
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	FUKUZAWA Yukichi 3
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000017-0126

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福澤諭吉とアート

――奢侈・進歩史観・フェミニズム★1

池田　幸弘

1. 徳の人、福澤とアート

福澤諭吉、慶應義塾の創立者にして文筆家、そして事業家。この福澤について、近代芸術、近代美術との関係を論じなさい、というのがわたくしども執筆者にあたえられた宿題である。これは難題だ。その困難さに呻吟しそして嘆息した。まず、このテーマについて主題的に福澤が論じたものは見当たらないという事実がある。さらに、文字通りの断簡零墨を対象にしてみても、近代芸術について、あるいは限定して近代美術について彼が肯定的にあるいは積極的に評価したものは、なかなか探し当てにくいということがある。

あるいはごく一般的にいって、「衣食足りて」の格言のとおりで、幕末から明治の初期にかけての時代は、政治的な激動期であるにとどまらず、経済的にも容易ならざる時期にあったに相違なく、アートの問題というのはなかなかに入り込みにくい問題であったに違いない。したがって、「衣食足りて」いない日本人にとってとりあえず「衣食足りて」の段階を可能にするような制度的変革に頭を悩ましていた啓蒙思想家、福澤にたいして、この問題についての成熟した判断を求めるのはもとより困難であろう。また、福澤の優れた人格がならしめるところでもあるが、彼には、たとえば後年の坂口安吾がおそらくは偽悪的なニュアンスをこめて顕彰したような悪徳にたいするポジィティブな感覚が欠如している。アートが悪徳そのものではないにせよ、悪徳の要素を全面的に排除した社会、そしてアートというものもおそらくはつまらないものである。

しかし、そうであっても、自身述べている「多事」にかかわるのを好み、また事実そうしていった福澤は、晩年には広い意味でのアートとかかわる機会もあり、もし彼がもうすこし若ければ、また彼がもうすこし早い時期にアートとかかわれる余裕があったならば、という想定は十分に魅力的である。

また、アートと福澤という主題自体、この思想家の意外な諸相を明らか

にするには貢献すると考えられ、私としてもこの困難な主題を奇貨として、あえて非力にもかかわらず執筆の責をふさごうと考えた次第である。

以下、この問題に接近するために三つの論点を準備する。すなわち、奢侈、進歩史観、そしてフェミニズムである。この論点ごとに福澤とアートとの関係が語られる。そして、最後に簡単な要約がなされる。

2. 奢侈とアート

アートが衣食に直接かかわらない不要不急の対象だとすれば、そしてアートをもし消費財として考えるのであれば、それは範疇として奢侈もしく奢侈財に含まれることになる。奢侈についての議論は、西欧の経済思想史、政治思想史では重要な論点で、18 世紀においてもディヴィッド・ヒュームなどをはじめとして奢侈論にかかわった思想家は多い。いまその議論を要約的に示せばつぎのようになろう★2。

生活のために不可欠なものが、必需品（Necessities）である。そして、これを超える欲望充足の対象が奢侈品（Luxuries）である。資本主義の全面的な展開に伴って、後者が拡大していくことは当然だが、これを肯定的に考えるかあるいは否定的に考えるかをめぐって、さまざまな議論がなされた。とくにモラルを重視する立場からは、不要な奢侈をよしとしないという見解も提出され、奢侈を資本主義の原動力として考える肯定論との対立は激化していった。もっとも、改めて考えるまでもなく、何が必需品であり何が奢侈品であるかは歴史的に規定されるものであり、古い時代には奢侈と考えられていたものが、時代が進むにつれて必需品となっていった例はあまた存在する。

以下でみる福澤の奢侈論は、以上紹介した西欧政治思想、経済思想での奢侈論の展開を受けているように思われるが、彼独自の、日本の現状をふまえた議論は福澤の完全なオリジナルである可能性もある。以下、明治 20 年 6 月の『時事新報』紙上の記事である★3。

> 天下太平商売繁盛して人民衣食住の程度次第に上進し、麦飯は米の飯に進み、菜食は肉食に変じ、裸体に綿服を覆い、綿服は絹布に改まり、茅屋変じて瓦屋根となり、長屋を毀て煉瓦石室を建築するが如き、何れも皆奢侈の沙汰なれども、我輩は此奢侈の様を見て欣喜に堪えず、加之衣食住生活の要用を離れ、戸外庭園の木石、室内装飾の珍宝、酒池肉林の盛宴、歌舞管弦の行楽、一攫千金愛しむ所なきが如きは純然たる豪奢なれども、我輩は之を咎めず、豪奢即ち人生の快楽にして、斯る豪奢を逞うし快楽を享る人の多き国こそ文明の富国にして、羨ましき事なれ。（福澤『全集』11，275-6 頁）

このように、福澤にあってとりあえず奢侈は肯定的に評価されている。奢侈が一般的になった国こそが文明国だというわけである。啓蒙思想の体

現者の福澤としては当然の判断かもしれない。ここにあがっている「戸外庭園の木石、室内装飾の珍宝、酒池肉林の盛宴、歌舞管弦の行楽」のうちいくつかは、アートと呼んで怪しまれない例である。消費の対象としてのアートは福澤にあっても奢侈品として分類されていることを確認しておきたい。

福澤の奢侈論はこれにとどまらない。彼はやはり西欧経済思想ですでに展開されていた生産的階級、不生産階級の区分を彷彿とさせるような仕方で、両階級の機能を分別している。

> 先ず其種族を二様に区別し、一を生産の種族として、一を不生産の種族とす。即ち農工商は生産の種族にして、其働は直に人生需要の物を作り、又之を運転受授して、人の奢侈快楽の便利を達するものなり。又僧侶学者官員等の如きは、国民の徳心を導き其智識を開き社会の安寧を維持するの任に当りて、間接には生産の根本を司るものなれども、直に其人の働きより物を生ずるに非ずして、寧ろ物を消費するのみの種族なれば、今の人智の了解する所にて不生産の名は免かる可らず。（福澤『全集』11，276 頁）

上記の分類は西欧でなされていた議論を若干アレンジしたもので、とくに新しいものではない。福澤はスミス経済学そのものではないにしても、それに多かれ少なかれ範をとったウェイランドの経済学などには通暁していたので、生産的労働論についてもそれに立脚した階級の二分法についてもよく通じていたに違いない。士農工商という日本モデルに照らしてみるのならば、少なくとも上記の引用では士族についての言及はない。が、おそらくはこれも不生産的階級として分類されていたのではないかと推測される。

福澤はこのような両階級の分類を前提にしたうえで、さらに奢侈論を展開する。

> 生産の種族即ち一国農工商の社会にて其生活の程度を進め、衣食住要用の外に逸して奢侈の境界に入るも、我輩は之を咎めざるのみか、却て其盛んなる有様を見て国の為めに賀するとの次第は、前節に記して読者の耳に逆わざりしことならんと信ずれども、其奢侈の風俗をして不生産の種族即ち僧侶学者官吏等の社会に流行せしむるの一義に至ては、今の人事の有様に於て我輩は口を極めて其害を云わざるを得ず。（福澤『全集』11，277-8 頁）

このように述べて、奢侈が許される階級としからざる階級とを福澤は区別する。前者が生産的階級たる農工商階級、そして後者が僧侶学者官吏などの不生産的階級であり、不生産的階級の奢侈はきわめて有害だと福澤は

批判する★4。生産的階級は奢侈財、奢侈品を買わんがためによりいっそう働こうとするので、奢侈はその生産意欲に良い影響を与えるといってよい。だが、このようなメカニズムは不生産的階級においては働かない。こう福澤はいうのである。また、不生産的階級は一般的に社会的には高い地位を有しているので、その奢侈が社会全般に広がる危険性もあると彼は指摘する。以下のように、フランスの事例などをひいて、奢侈の上層階級から社会全般への普及、伝播について、福澤は懸念する。

> 今上流の社会にて華美を好むとあれば、其風俗の下流に移るや直郵して命を伝るよりも速く、先進より後進に伝え、都会より地方に及ぼし、遂に全国一般不生産の種族中に、浪費奢侈の元素を伝染せしむるに至る可し。甚だ面白からざる次第にこそあれ。むかし仏蘭西政府にてルイ十四世の末年より豪奢の風漸く流行し、遂に政府外にまで伝染して、上下の病弊の致したるの事例は、天下後世の誡として視る可きものなり。（福澤『全集』11，283 頁）

上層階級から下層への風俗の伝播は急速で、ついには社会全体の不生産的階級にそれが普く浸透する。そして、ルイの治世にみられたように上下にかかわらず奢侈の風が蔓延するに至る。こう福澤は言うのである。

『時事新報』の所説に先立つことほぼ 2 ヶ月、首相伊藤博文主催の仮装舞踏会が開催された。その豪奢なことは音に聞こえていたが、これへの参加を福澤は謝絶している。文面上の理由は「家事の都合に由り拝趨仕りかね候」（福澤『書簡集』5，183 頁）ということだが、ややぶっきらぼうな文面からは政府主催の華やかな舞踏会にたいする冷ややかな態度を読み取ることができる。

すでに見たように福澤は奢侈そのものにたいして批判的であるわけではない。とくに、生産的階級の奢侈はむしろ積極的に評価しているといってよい。だが、当時の歴史的文脈でいえば、官界や政界の一部、あるいは支配者層全般によどんでいた、上滑りした奢侈、たんなる顕示的消費（ヴェブレン）と呼ばざるをえないような奢侈にたいしては、きわめて批判的だった。

3. 進歩史観とアート：古物崇拝

福澤が文明の進歩ということについて、その生涯の時期によってさまざまな振幅を伴いながらも、基本的には楽観的な見解を抱いていたことはしばしば指摘されるとおりである。以下では、福澤の進歩史観と彼のアートにたいする見解がどのように関係していたかを見ることにしたい。

ここで題材とするのは『福翁百話』である。同書は元来福澤の『時事新報』上で掲載されたもので、すでに明治 27 年には完成していた。しかし、日清戦争の勃発に伴い、福澤自身が戦局の展開をふまえた評論の執筆

に時間をとられており、実際に公刊が始まったのは明治29年の3月からとなった。翌年の7月に100回目となり完結し、7月中に時事新報社から単行本としても発刊された。

本書の88話では将棋の技法の進歩が語られている。まずはここから議論をおこしたい。

> 相撲なり芝居なり又詩歌なり、本来人情に訴えて人々の贔屓不贔屓もあることなれば、古今老少いずれか巧拙と云うも是れは姑く水掛論として敢て一歩を譲り置き、後進性の伎倆能く古人を凌駕したるの事実に付き退引ならぬ証拠あれ。即ち将棋の芸道是れなり。（福澤『全集』6，351頁）

相撲、芝居、詩歌などはおそらくはアートかあるいはそれに近いものとして理解されている。これについては「人情」つまりは人の好みによって「贔屓不贔屓」もあり、客観的な評価はしづらい。これは福澤も認めている。だが、後になればなるほどその技術が勝る、このような進歩が明らかな領域があるという。その証拠としてあがっているのが将棋である。福澤は続けていう。

> 日本国にて将棋の開祖は大橋宗桂と称し、織田信長に仕えて当時絶倫の名人なりしかども、初代宗桂の死後この芸術は次第に進歩して、五代目宗桂は初代に優り、十代目は五代よりも強し。……仮りに三百年前の宗桂を呼起して宗歩と戦わしめなば、勝利は必ず後進の宗歩に帰して、流石の開祖も顔色を失う其事情は、末世の学者が先哲と議論し、小僧坊主が開山上人と問答して、数千年来の信仰尊崇を顚覆するに等しきものある可し。（福澤『全集』6，351-2頁）

引用の前半では、将棋の技術、技量は後代になればなるほど進歩するということが指摘される。そして、もし開祖がいまかりに生き返って後進の者と対局としても、開祖に勝ち目はないだろうという。それは、現代の学者が先哲と議論するのと同様で、ここでも先哲の側に分はないとされている。

これは非常にわかりやすい進歩史観とその適用例である。将棋や学問、そして宗教も時代が進むにしたがって、その技術、技量が向上していき、後になればなるほど優れたものになっていくという福澤の強い確信がここには感じられる。元来、将棋のような技量による勝負がはっきりする領域と、かならずしもそれとは同列には語りえない学問、宗教のような領域があるはずだが、読者を説得するための術としてかそのための方便かはいまおくとして、この両者を峻別しようとする視点はここには感じられない。

続く89話では書画骨董の類が主題となる。これはアートそのものと考

えてよいであろう。まずは冒頭の議論である。

> 古物古器古書画骨董の類、これを宝として貴重するは甚だ善し。歳月の経過と共に次第に消滅散逸して唯滅却するの一方なれば、後世子孫たる吾々の義務として永く保存の法を謀り、又私には個人の好事に之を弄び自から懐古愛美の心を養うも亦是れ文明人の事なり、咎む可からざるのみか、肉欲以上精神の高尚なるものとして視る可きなれども、其懐古尚古の情に制せられて遂には事実を忘れ、漫に古を美として後世を軽んずるに至りては我輩の服せざる所なり。(福澤『全集』6, 353頁)

古いものを重んずるのはそれ自体意味のある行為である。これらは年月がたつにつれて、磨耗したり破損したりするので、これを保存するのはわたくしたちの義務であるとしている。古物の保存、維持、要するにアーカイブ化については福澤もこれを認めるについてはやぶさかではない。だが、アクセントは明らかに引用の後半部分にある。古いものを古いということだけで美化し、その後の史的な発展、現代に至る進歩を等閑視するのは、断じて容認できないというのである。議論自体が88話の延長線上にあることは明らかであろう。これに続く部分はやはり人を驚かせずにはおかない。

> 大阪の城は見事なるに相違なしと雖も、今日に於て果して此種の城の必要を感じて金をさえ投ずれば其工事甚だ難からず。木曾川の鉄橋を始めとして諸鉄道のトンネルなど見れば、大阪城の如き入札の日限を誤らずして落成し可べし。奈良の大仏、法隆寺の建物、芝上野日光廟、その成否は唯銭の問題のみ、資金に不自由なければ今の技師の手を以て同様のものを作るのみならず、更らに之を洪大にして更らに精巧ならしめんとするも敢て辞せざる所なり。(福澤『全集』6, 353-4頁)

ここにいたって、福澤は城の建築や鉄橋建設は金次第だというのである★5。ここでも、さきの議論と同様に技術の問題とアートの質の問題は、意図的かあるいは無意識的かは定かではないが混同されている。鉄橋建設は端的に技術の問題である。だが、実際には大阪城の建築は技術の問題であると同時にアートの問題である。この二つのことなる領域は福澤にあっては、混同されたまま議論は進んでいる。

4. アートとフェミニズム

福澤のフェミニズムについてよく知られているし、研究の蓄積も十二分にある★6。西欧の思想家でいえば、ジョン・スチュアート・ミルの女性論はよく知られているし、またミルの所論が時代を超えていることはしばし

ば指摘されるとおりである。しかしながら、これは進歩的な事例であり、実際にはもっとあとになっても、女性は一般的には保護の対象であり、また抑圧の対象でもあった。時代的には福澤と重なるところがあるウィリアム・スタンレー・ジェボンズなどにとっても、女性は庇護の対象であり子供と同様に自由な権利の主体ではなかった★7。

こうした西欧での一般的な風潮に鑑みると福澤の所説はきわめて進歩的なもので、フェミニズムにかならずしも同調できない者が読んでも、その議論は爽快ですらある。本節では、フェミニスト福澤の所論がアート、とくにアートの享受者としての女性という観点からどのように読めるかをみていきたい。

本節で考察の対象とするのが福澤の『女大学評論』である。まずは批判の対象となっている『女大学』中の章句を引用しておこう。

> 女は常に心遣いして其身を堅く謹護べし。朝早く起き夜は遅く寝ね、昼は寝ずして家の内のことに心を用い、織縫績緝怠べからず。茶酒抔多く飲べからず。歌舞伎小唄浄瑠璃杯の淫たることを見聴べからず。宮寺抔都て人の多く集る所へ四十歳より内は余り行べからず。（福澤『全集』6，486 頁）

多くの解説は不要だろう。典型的な旧道徳の表現である。福澤の筆致は厳しい。

> 歌舞伎小唄浄瑠璃を見聴くべからず、宮寺等へ行くことも遠慮す可しとは如何ん。少しく不審なきに得ず。抑も苦楽相半するは人生の常にして、茲に苦労あれば又随て歓楽あり、苦楽平均して能く勉め能く楽しみ、以て人生を成すの道理は記者も許す所ならん。然らば則ち夫婦家に居るは其苦楽を共にするの契約なるが故に、一家貧にして衣食住も不如意なれば固より歌舞伎音曲などの沙汰に及ぶ可らず、夫婦辛苦して生計にのみ勉む可きなれども、其勉強の結果として多少の産を成したらんには、平生の苦労鬱散の為めに夫婦子供相伴うて物見遊山も妨なきことならん。（福澤『全集』6，486–7 頁）

主張は明快である。人生において苦楽はあい半ばするのが通例であるから、苦労があれば多少の悦楽、歓楽は当然のこととして享受するのが適当である。もちろん、食うや食わずという状態では歌舞音曲の類を楽しむことは不可能で、そのような状態では夫婦ともに家計のために倹約、節倹につとめるべきだが、その結果として多少の余裕ができれば、夫婦が子供を伴ってこのような楽しみを享受するのは悪い話ではない。このように福澤は述べるのである。

福澤の女性論がいわばネガとして男性論を含んでいることはしばしば指

摘されるが、ここもそのような箇所の一つである。

> 朝野の貴顕紳士と称する俗輩が、何々の集会宴会と唱えて相会するは、果して実際の議事、真実の交際の為めに必要なるや否や。十中の八、九は事を議するが為めに会するに非ず、議事の名を利用して集るものなり。交際の為めに飲むに非ずして飲む為めに交わるものなり。其飲食遊戯の時間は男子が内を外にするの時間にして、即ち醜体百戯、芸妓と共に歌舞伎をも見物し小歌浄琉璃をも聴き、酔余或は花を弄ぶなど淫れに淫れながら、内の婦人は必ず女大学の範囲中に蟄伏して独り静かに留守を守るならんと、敢て自から安心してますます佳境に入るの時間なり。（福澤『全集』6，487 頁）

前段では日本社会における酒席の意義についても批判的に言及されている。その議論はおそらくはとくに独創的なものではなく、しばしば指摘される類のものである。議するがために会うのではなく、むしろ会うための名目として議事というものが利用されている。また、交際のために飲むのではなく、むしろ飲むための名目として交際が利用されているに過ぎない。福澤自身は少なくともある時期までは大酒のみで、また修行時代には多くの若者がそうであったように、酒席での談論風発を楽しんだことは事実であろう。だが、ここで問題になっているのは、そうした談論風発とはことなるいわば制度化された酒席であり、それが批判の対象となっているのである。後段では、福澤独自の男性論あるいは女性論が展開されている。歌舞音曲は良い。だが、それが男子が芸妓と戯れるための口実となり、その間婦人は宅でじっと留守を守るべしということであるのならば、それは福澤にとっては断じて受け入れられないところであった。婦人も歌舞音曲の享受者たるべきであり、女大学の道徳は女性にそれを禁ずる反面で男性が外で遊ぶための隠れ蓑になっているのというのが、福澤の理解であった。

もとより、総じていうのならば、福澤にあっては女子教育における音楽、茶の湯、いけばな、俳諧、書画の役割は大きなものではない。むしろ、百人一首などは現代語に訳すれば「婬猥不潔」（福澤『全集』6，508 頁）きわまるもので、推奨の対象とはなっていないのである。それよりも、焦眉の課題は男女ともにその「智識」の向上であり、それこそが福澤が生涯主張し続けたことであった。こと「智識」の領域にかんしては男女間で大きな相違はない、いやむしろあってはならないというのが、福澤の考えであった。以下、「新女大学」の議論である。

> 貴賤貧富に論なく女子教育の通則として、扨学問の教育に至りては女子も男子も相違あることなし。第一部物理学を土台にして夫れより諸科専門の研究に及ぶ可し。……物理生理衛生法の初歩より地理歴史等

の大略を知るは固より大切なることにして、本草なども婦人には面白き嗜みならん。殊に我輩が日本女子に限りて是非とも其智識を開発せんと欲する所は、社会上の経済思想と法律思想と此二者に在り。（福澤『全集』6，506-7 頁）

みられるように、福澤は原則的には男女間で教育の内実に相違を認めていない。まずは物理学をはじめとし、それから他の諸学問、諸科学に向かう。とくに重視されているのが、経済と法律である。これらの学問にかんする知識の欠如が女性の地位の低さに貢献してしまっているというのが、福澤の基本的な認識であった。

このように福澤の敵はさまざまな形で存在していた。まずは、アートの享楽は男に限るという議論にかんしては、そこに典型的な男尊女卑の思想を嗅ぎ取った。女性も、またアートの享受主体になりうるという議論がそれである。しかし、他面で、アートとくに女子教育におけるそれが暗黙裡に前提としているような、アートはそもそも「女子供」のもので男子たるものがかかわるものではないという認識にも組していない。そこには、アートや感性は女性的なもので、知識は男性のものあるいは男性の領域に属するというジェンダー・バイアスがあるからである。まずさしあたり、日本の発展に必要なのは知識であり、そこには男女の違いを認めないというのが福澤の基本的なスタンスであった。

5. 福澤とアート：暫定的な結論

以上見てきたように、福澤のアートにたいする姿勢はけっして単純なものではない。彼がアートにかんして述べた批判的なあるいは警句的な見解のいくつかは、アートそのものというよりは、福澤が見聞きしたあるいは経験した当時の日本における歪曲された「アート」にかんしてなされたコメントであった。連日のように繰りかえされる官界、政界主催の華やかな仮想舞踏会。女性を排除した場で行われる歌舞音曲とそれを楽しむ男性たち。あるいは逆に、ある種の「アート」を女性固有のものとして、知識の領域から女性を遠ざけようとする露骨なジェンダー・バイアス。これらは福澤の目からすれば、アートの正常なあり方とはほど遠かった。ただし、それだけにとどまらず、実際のところ福澤は進歩にたいする素朴な信仰があり、これは他の啓蒙思想家とある程度共通した側面かもしれない。それが、アートにたいする評価を曇らせていることは否定できない事実である。

また、幕末からの伝統的な文脈でいえば、儒者の教養とアートとは切っても切れない関係にあり、これがまた福澤をアートから遠ざけたことも指摘しておかなければなるまい。『福翁自伝』のつぎの箇所は比較的よく知られているかもしれないが、ここでも煩を厭わず引用しておきたい。

儒者のすることなら一から十まで皆気に入らぬ、就中その行状が好か

ない。口に仁義忠孝など饒舌りながら、サアと云うときには夫れ程に意気地はない。殊に不品行で酒を飲んで詩を作て書が旨いと云えば評判が宜い。……よしよし、洋学流の吾々は正反対に出掛けて遣ろうと云う気になって、恰も江戸の剣術全盛の時代に刀剣を売払て仕舞い、兼て嗜きな居合も罷めて知らぬ風をして居たような塩梅式に、儒者の奴等が詩を作ると云えば此方は態と作らずに見せよう、奴等が書を善くすると云えば此方は殊更らに等閑にして善く書かずに見せようと、飛んだ処に力身込んで手習をしなかったのが生涯の失策。（福澤『全集』7，229 頁）

福澤には「無芸殺風景」（福澤『全集』7，229 頁）の書生気質を尊ぶようなところがあり、このような若き日の乱暴狼藉と勉強の日々を懐かしく回顧する場面が『福翁自伝』のクライマックスでもある。そして、それが後年の上昇転化を遂げた明治の名士の行動モラルにたいする厳しい批判となってあらわれる。

しかし、繰りかえし述べるならば、福澤はアートそのものを否定しようとしたわけではない。ここに「生涯の失策」と述懐しているように、晩年の福澤は団十郎をはじめとする役者と知り合う機会もあり、その間彼のアートにたいする認識は深まった可能性もある。また、自身戯曲の脚本を書いたという事実もある★8。もし、日本の経済や政治にかんする情勢が概ね定まり、安定的な局面に入ることが早かったならば、警世家福澤にも許されるいささかの暇もあったであろうし、「多事」にかかわることが好きだった福澤がアートにたいする認識を深化させた可能性はあるかもしれない。「異端」と「妄説」をあれほどまでに肯定的に評価した『文明論乃概略』の著者とアートとのさらなる邂逅はいかなるものであったのか。だが、これはやはり歴史過程についての IF の類であり、判断は禁欲しなければならないだろう。

註

☆1 ── 成稿にあたり西澤直子慶應義塾大学福澤研究センター准教授ならびに小室正紀慶應義塾大学経済学部教授の懇切な御指導にたいして、深謝したい。お二人の御示教なしには本稿は書かれえなかった。もちろん、本稿にかんしてのすべての責は私のみに帰するものである。本稿で福澤の全集、書簡集からの引用の場合は、福澤『全集』巻数、頁というように略記する。いずれも岩波書店（全集、1969-71 年刊行、書簡集、2001-3 年刊行）のものを使用した。また、引用にさいしては、漢字は原則新字体に改め、また仮名も旧仮名遣いを改めた。個々の書籍、論説の公刊前後の事情については全集に付せられた解説によるところが大きい。

☆2 ── 西欧政治経済思想における奢侈論と福澤のそれとの関係については他日を期したい。ここで言及したヒュームの奢侈論については、坂本達哉『ヒュームの文明社会 ── 勤労・知識・自由』創文社、1995 年を参照。福澤が指摘している奢侈の上層階級から中間層、下層階級への伝播については、西欧でも多くの思想家が言及するところであり、とくに独創的な見解だというわけではない。

☆3 ── いま『時事新報』掲載の記事について、福澤が実際に書いたものかどうか

という真偽の問題については立ち入る暇もまたそのための学問的準備も私にはない。この点についての平山洋の指摘はきわめて重要で、authorship の問題はこれからもつめられるべき問題ではあることは論をまたない。ただ、事実上この新聞の社主であった福澤に、実際の執筆を誰が行ったということとは独立に、掲載された論考の内容に責任があることも事実で、これは対アジア認識についても同様である。広い意味での製造者責任を福澤が免れることは困難であろう。平山洋『福沢諭吉の真実』文春新書、2004 年を参照。また、この問題について、私のみるところではバランスのとれた見解だと思われるつぎの論考をも参照。都倉武之「時事新報史」、慶應義塾大学出版会 HP, http://www.keio-up.co.jp/kup/webonly/ko/jijisinpou/1.html

☆4 ── スミスにも、国王をはじめとする上層階級と中間層以下の奢侈を区別しようとする議論がある。奢侈におぼれる国王や大臣が後者にたいして奢侈を禁じようとするのは、僭越というほかないという議論がそれである。これについては、堂目卓生『アダム・スミス── 道徳感情論と国富論の世界』中公新書、2008 年、196 頁などを参照。

☆5 ── 拝金宗の福澤という像は、明治 30 年代にはとくに珍しいものではなかったようで、それを体現するのが明治 33 年に出された『学商福沢論吉』である。しかし、福澤は、まずは江戸期の支配者層に強くあった蓄財はそれ自体悪徳であるというモラルを批判せざるをえなかった。そして、まさに、書きながら蓄財し蓄財しながら書くというのが福澤のスタンスであった。世事に疎い学者先生はその限りでは批判の対象となるし、逆に学理に暗い事業家についても福澤に容れる余地はなかった。このような側面からの福澤研究としては、玉置紀夫『起業家福沢諭吉の生涯 ── 学で富み富て学び』有斐閣、2002 年参照。とくに『学商福沢諭吉』にかんしては同著 283–5 頁を見られたい。また、明治 30 年代の福澤評価の特質と問題点については、内山秀夫編『一五〇年目の福沢諭吉 ── 虚像から実像へ』有斐閣選書、1985 年所収の座談会で丸山眞男が言及している。

☆6 ── 福澤のフェミニズムと書簡などにみられるインフォーマルな発言のなかにみられる女性観との興味深いずれについては、西澤直子「書簡にみる福沢諭吉の男女論と男女観」、『近代日本研究』第 20 巻、2003 年所収を参照。ただ、私の認識では、この程度のずれは私を含めて多くの人文科学・社会科学系の研究者が共有するものであり、官見の限りでは福澤におけるずれはさほど大きなものではないとも考えられる。また、日常生活レヴェルでの一個人としての私的見解と、学問的な見解との齟齬は、それ自体すべて否定的に解する必要はない。

☆7 ── ジェボンズの所論についてはつぎを参照。William Stanley Jevons, *The State in Relation to Labour*, Macmillan and Co., London and New York, 1887. ジェボンズの見解は当時にあってはごく一般的だったと考えられる。

☆8 ── 石河幹明『福澤諭吉傳』第 4 巻、岩波書店、1932 年、521–2 頁を参照。

（いけだ　ゆきひろ・所員、慶應義塾大学経済学部教授／経済思想史）